

研究会 公共サービスと協同労働

(報告)

ワーカーズコープの学童保育事業と民営化



設楽明彦(労協センター事業団)

ザーの、お金をかけた営業プレゼンテーション、おそらくこれを見たのは私しかいないと思うんですが、もうすさまじいです。幼稚園教諭を経た方らしいんですが、その方がマニュアルに基づいて報告したプレゼンテーション。それを見てですね、何にびっくりしたかということ、報告の中に子どもが見えてこないんですね。実践しながら、子どもたちはこうなっている、こう変化している、お母さんたちとの関わりはこうだっていうのが、一貫して見えない。ビデオみたいのを上映したり、見た感じ非常にいい感じだったんですが、私は、これはもう本当にどうかと。自分もプロポーザルに参加している訳ですが、本当にどうかと思いました。

東京においては、委託に当たっては当然内容も問われますけれども、設置主体っていうのが問われて、やっぱり本当に個人的には営利企業には広がってほしくないなあと思います。先ほど真田さんがおっしゃっていましたが、子どもの利益に関係なく、撤退していくっていうのが企業の当然のやり方になると思います。

その時のプロポーザルで、私たちはお金をかけられませんでしたけれど、本当に自分たちがやってきた子どもの状況や、ワーカーズコープの理念、歴史など、模造紙一枚という形でしたけれども、それでやってきました。いろいろあるんですが、「民間委託=悪」というのは本当にやめていただきたいと切に言いたいと思います。

ワーカーズコープは、以下の学童保育を運営しています。2002年4月より板橋区板橋第一学童クラブ、2003年4月から足立区わくわくクラブ、これは商店街の中の学童クラブです。同じく板橋区の志村第一学童クラブ。今後は4月より新宿区榎町児童センター、新宿区早稲田南子ども館、両施設とも、児童館・学童クラブ機能です。足立区中島根学童クラブ、板橋区高島平第七学童クラブです。

今日は、あくまでも研究会なので、個人的な立場ということでご了承いただいて、報告いたします。

自治体委託における民間企業のプロポーザル

まず、ある自治体の学童クラブの民間委託のプロポーザル(企画提案)をめぐる営利企業の実態についてです。企業のスーパーバイ

あたりまえのことを大切にする

私たちは、学童クラブを責任を持って運営している訳ですが、そこで何を大切にしているかということをお話ししたいと思います。子ども一人の育ち、それは当然生育歴も含めて、お母さんによく聞きながら共にやっています。とにかく、現状をよくつかんで実践しています。

レジュメに「Sくんのこと」と書いてあるんですけども、私が、学童クラブを受託して非常に気になった、事例がありますので報告します。学童クラブ開設準備中の3月下旬の親子面談のときのことで、お母さんからは、Sくんが前の学童になじめず、いろいろと先生にも相談をしていたようでした。Sくんの表情も少し暗かったので、私は励ますように「校庭で思いっきり鬼ごっこしようよ」と明るく話しました。体を動かして遊んでSくんと信頼関係をつくることにしました。実際よくSくんの姿を見ると、体を動かすのが大好きだということがわかって、鬼ごっこなんかでも走るのが早い。そこで、リレーなんかやっても、他の子たちがびっくりするわけですよ「なんだSくん早いじゃない、走ると」と歓声があがって、私もみんなの前で誉めました。これがSくんの自信につながったのか、断定はできないですが、行動に自信が満ちてきて、5月の個人面談でも6月の保護者会でも、Sくんのお母さんから、「本当にいろいろと学童クラブのことを話してくれていますし、先生にお話して安心している」という言葉をいただいて、私、本当に感動したんです。

私は板橋区の志村第一学童クラブというところにいるのですが、これは近隣の学童クラ

ブと合体して、新1年生を含めて、空き教室 この評価はまた別にあると思いますが を使ってやっています。これはただ行政がつくったというだけではなくて、Sくんのお母さん含め、署名活動をして、設置してくれということで成り立った学童クラブです。

「Kちゃん・Mちゃんについての実践記録」

「Kちゃん・Mちゃんについての実践記録」と書いてありますが、これについて説明します。私たちは学童保育の内容を深めて、良くしていきたいということで、事例検討を大切にしています。月一回こういう自由な形で書類をつくって、事例を検討や実践報告を合っています。それぞれみんな「これはどういう気持ちでやったの?」「どんな思いでやったの」ということを率直に言い合って、そういう中でお互いに成長しあう関係をめざしてやっています。

私たち実践検討と学習を大切にしていって、今年は一となる書房さんの『受容と指導の保育論』『遊び仲間の教育力』という本を勉強したり、『日本の学童保育』を読み合わせしたりしています。今、子どもの指導を含めてもいろんな考え方があるので、目の前の子どもに即して、現状をつかんで、論議しています。

後でも触れますが、マニュアルは絶対につくりません。しかし、ワーカーズコープとしてはこういう方向でいきたいという指導要綱みたいのはできたらいいなということで、その基礎、最低限の枠みたいのは今私たちで現場討議を含めてつくっています。

先ほど言ったように、3つの学童での事例検討会を月一回やっているのですが、Kちゃん

んとMちゃんが、どう学童クラブに馴染んでいくかということや、指導員の指導の観点とか、子ども同士の具体的な関わりを含めて、日誌をもとに記録をとっています。

真田さんも触れた、川崎の例を私も新聞で読んだのですが、本当に見ているだけ、「自主性」の名の下に、放っぼってただけでいいのか、ということに疑問に思っています。私たちとしては、保護者と相談しながら、具体的な子どもを目の前にして、やっているということをお伝えしたいと思います。

今年3つの学童を受託していて、来年度も増えるんですが、学童の地域状況があるわけですね。「わくわくクラブ」は、足立区の商店街の中にあるんです。空き店舗を利用して開設しました。本当に狭い空間なのですが、この空間を利用しつつ、近隣に公園があるので、そこも利用しながらやっています。その保護者に非常に共感していただきまして、近隣でも保護者から、「とってもいいわよ」みたいな支持がでていて。何がいいかっていうのは、実際見てもらうしかないんですけども。やはり東京では、民間委託っていうのは風当たりが強いんです。そうじゃないっていう形を実際見て、知っていただきたいと思います。

保育内容と父母・保護者の関わり

私たちはマニュアルを使いません。1日の動きを、何から何までマニュアルに即してやれということはありません。地域の実情にそれぞれ即してやるっていうことです。遊び 遊んでいればいいってことではないんですがを重視しています。どういうふうに遊んでいるかということ、これは当たり前なことなんです、外では鬼ごっこしたり、ドッチボール

やサッカーをしたり、部屋の中ではボードゲームしたり、絵を描いたり、いろいろと手作業をしたり、環境を設定してやっているんです。そういう今まで積み重ねてきたものを現状に即してやっているということです。生活の中でもグループや班を重視してやっています。

今、異年齢集団ということが非常に重視されていて、どこでも出ているんですが、異年齢集団を大事にしようと言ってもそれはお題目に終わってしまう。実際の遊びの場面とか、実際のグループ活動の中で、遊びができるように取り組んでいます。野球などやっても、男の子が多いんですが、わが学童クラブでは女の子も参加できるように取り組んでいます。

それとお便りを、基本的に月1回、子どもの実名を出してお母さんたちに配っています。あと、お迎え時の連絡や、何かあれば電話連絡、保護者会、個人面談というのは重視して何度もやってきています。とにかくそういう保護者との信頼がないとすべてがうまくいかないの、そのことと、子どもを真ん中にして「共育て」という観点で行っています。私自身が、今年保育士になって22年くらいなんですが、ずっと「共育て」をテーマにしている保育園にいたので、保護者と連絡するというのは当たり前と思っているわけですが、学童クラブは全員がお迎えに来るわけではないので、意識して電話するなどしています。

どちらにしても、一人一人の育ちを大切にすること、現状をよくつかむということ、事例検討を重視すること、あとは学習ということですね。

地域との関わりでは、地域によって違うんですけども、午前中は乳幼児を対象にした

親子の広場をやっています。私たちの学童クラブにはたくさんのお母さんたちが参加してくれていて、取り立ててすごいことやっている訳ではないんですけども、悩んでいることや思っていることが相談できている。子どもの健康や発達について相談に乗ったりという形で進めていっています。ワーカーズコープは、地域の中で市民と共に手を携えてやっという形というのが、最大の方針です。

「市民主体の再生」

資料(日本労協新聞2月5日号)を見ていただきたいんですが、全労連・熊谷議長とワーカーズコープ・永戸専務などの懇談で、「市民主体の再生」ということで書かれています。引用しますと『保育とか学童、図書館、イベントホールなど、民営化と激しく動いています。ただ今度のやり方は一面では市民に開かれていて、「安ければ良い」というのではなく、市民が担い手にもなるし、担い手を選ぶ審査会にも参加できる形がとられています。労協も、企画提案を評価するプロポーザル方式で提案し獲得もしてきましたが、学童保育で言えば、そこに関わる父母や児童を主体者にするやり方をとって、そのことを市民が社会的に再生していく一環だと、考えてきました』また、『一旦は乱暴な民営化ということがあっても、もう一度社会化する。～保育のような伸びやかで未来志向で社会的なものは、子供たちが父母と社会の力によって守られていることをしっかり理解する人たちでなかったら、子どもたちに、いい環境をつくれません。～企業と違うあり方として、ワーカーズコープのような方式が～生まれていくというのは、すごい必然性がある。』とあります。営利企業ではなく、第三の道、という

ことでやっていきたいと思っています。

これからお話しされる雲柱社さんなども実績が長くて、学童クラブを8箇所くらい受託されているということで、私たちも学びながら広げていきたい。ただ誤解されたくないのは、「広げる」というのは別に儲けるためということではなくて、青年の失業率が10%を超えているという状況の中で、学童クラブで働きたいという若い人がいっぱいいる訳です。そういう青年の雇用拡大にも役立てていきたいと思っています。また、広がればそれだけ仲間が広がって、より論議ができて、より密になっていくということで、今は3カ所ですけれども、本当いろんな複数の目で学童クラブの視点を広げていけるということが、素晴らしいと思っています。

だから、民間委託受託しているのは悪徳業者とか、悪徳営利企業じゃないんだということを理解していただいて、保護者のみなさん、や地域の他の方々と共にいいネットワークができればいいなと思っています。

最後に、もしよろしければ、私たちワーカーズコープの施設を見ていただきたいと思っています。それも20分くらいだけ見て、評価するのではなくて、何回か見ていただいて、子どもの様子もよく見ていただいて、評価していただきたいなあと思っています。やっていることは、保護者と話し合いながら、連絡取り合いながら、子どもを中心に進めているということです。それから、学校の中にある学童クラブが多いので、学校との連携ですね。非常に重視しながらやっています。足立区では商店街なので、商店街との関係もつくりながらやっています。「わくわくクラブ」の責任者から、補足をお願いします。

中鉢順子(「わくわくクラブ」責任者)

昨年の1月に開所して一年間たちまして、民間委託ということで、保護者の方も地域の方も「どういうところだろう」という不安が強く感じられたんですね。親子面接、個人面談、保護者会などをしながら、信頼関係づくりをしました。

子どもたちに、自分たちが通って来ている商店街の中にどういう人たちがいるんだろう、ということに興味を持っていただきたい、商店街との関わりを持ちたいという気持ちで「商い体験塾」を開きました。商店街で、土日に朝市があってフリーマーケットが出てたり、売り出しをしている。子どもたちも駄菓子なんか販売して、「商い体験塾」を行いました。そういったことから、子どもたちもお店の人たちと挨拶をする、商店街のお店のおじさんおばさんと挨拶を交わしたりして、それが安全につながっているのではないかと思います。

昨年末には、「子どもたちが減ってきて行事がとてもさみしい」という町会の方から話がありまして、「わくわくクラブ」の子どもたちも町会の餅つき大会に参加いたしました。父兄や地域のお父さんたちも参加していただいて、子どもたち自身も新しい経験となり、楽しい経験につながったかな、と思います。こうした活動が、地域の方々にも伝わり、「ワーカーズコープが運営するのなら」という信頼をいただきまして、新しい学童の話しがあり、まだ立ちあがってもないのですが、定員15名くらいに30名近くの入室希望者があったという連絡がありました。こうした広がり、地域を信頼して、やっていきたい、と思い頑張っております。

(説楽)最後に、ひとつだけ。今、一人親

家庭が非常に増えております。昨日も入室の申込申請で話したんですが、父母が一家の大黒柱で働いている訳ですけども、問題は4年生になると学童クラブがなくなるということです。私たちの学童は45人定員なんで、それ以上は入れないんですが、保護者の方も「落ちたらそうしよう」って不安ですよ。本当に圧倒的多数の待機児童の問題があります。あとは、板橋第一学童には障害児もいるし、今度受託する高島平第七学童クラブにも障害児はいるんですけども、その障害児に対する対応というのもいろいろあります。

保護者の労働を保障しながら、子どものそれぞれの実態に即して対応していくというのは、大変な重責だなと思っています。だからこそ、私たち委託金額もどんどん増額していかないと、実際大変なことになるなと個人的に思っています。そのために中身の向上と実績づくりを組合員と保護者と力を合わせてやっていきたいと思っています。

< 質疑 >

男性A: 埼玉で学童連絡協議会の事務局職員をしています。今日はたぶん東京の参加者が多いかと思うんですが、埼玉の場合は、公立公営が65%くらいで残りは民間です。われわれ埼玉連絡協議会に加盟しているのは圧倒的に民間で、父母会、保護者会が経営しているところが加盟しています。ワーカーズコープ自体は私はあまり認識がありませんでしたが、自分たちで学童立ち上げて、自分たちで運営するという形なので、今の報告について、全くというのではないですけども、違和感なく聞きました。「民間について偏見持たないように」と話しているっていうの

は、なるほどなって思いました。

一つは、プロポーザル方式についてですけども、区から、「委託をしたいのでついてはこの条件で」というものが出され、「うちもうちも」という形で参入して、そこで競争して、プレゼンテーションして、一番上手にできたっていうか、質がいいだろうっていうところに落札ということなんですか？

設楽：そうです。いろいろと参加したんですけれども、すごい細かいです。まず「基本的にこういう条件でやれ」ということではなくて、企画提案するんです。遊び、生活指導、健康、その他学童クラブの運営に関するすべてのこと、それと、団体の理念、地域の子育て支援についてどう思うかなど幅広い条項を提案します。私たちはある自治体には40ページくらいの企画書を書きました。実際にやっていることを書くとそのくらいになっちゃうんですけれども、それをやって、まず企画書出します。それが一次で通って、二次というのがだいたい、実際に保護者を前にしてやるわけです。そこで論議してあとはヒアリングをして、最後に、決定するという流れです。ある程度、委託金額が上がれば今後どんどん企業が参入してきますので、私たちとしては実績をあげながら、そういう営利企業と、競争して一角を占めるようにやっていきたい。やるにあたって、悪徳業者じゃないってことを、何度も言いますが、わかってもらいたいと思います。

男性A：区の方から示された委託料、これでやってくれというのはあるんですか。

設楽：だいたい何千万でやるとか自分で予算を出すのが多いです。

田中センター事業団副理事長(会場から)：自治体によって、予算を示す自治体と全く示さないで予算も含めて提案しなさいっていうところと、さまざまです。

男性A：具体的なところはどんな感じ？

田中：自治体によってなんですが、土曜日のない学童については大体、1,100万前後です。あと土曜日のある学童については、1,300万から高いところで、1,400万っていうところだと思います。数少ない経験の中では。

男性B：保護者会という言葉が出てきたんですけれども、名称はどちらでもいいんですが、一般に父母会は学童保育を自分たちで立ち上げて、経営と内容についての責任を持ち、月一回くらい定例会を開いて、指導員と一緒にやっていくという形なんですけれども、ワーカーズコープさんの言われた保護者会っていうのは、多分少し違う、父母の意見を聞く会議の場っていか、そんな雰囲気かなと思うんですが。

設楽：そうです。板橋第一学童クラブには、板橋連協加盟の父母会もあります。私たちはまだ出来たばかりなので、父母会はないんですけれども、どしどし自主的に父母会活動をやっていくという立場です。

男性B：すでに他の公立の学童保育がいくつかあるんですが、運営形態が違って、仕事としては子どもを見るってことでは同じ職種なことじゃないですか。そういった点での、指導員会議に参加させてもらうですと

か、情報交流するとか、そんなふうなことは。

設楽：あります。板橋区のことなんですけれども、職員研修が結構あるんですよ。それには全部参加していますし、たくさん学童があるので、ブロックごとに行事があるんですけども、その行事には我々も参加して、実行委員会形式で一緒に行事をつくり出しています。一概に「公立板橋」って言うても、学童によって中身が全然違うんですよ。基本的には私たちがそういう形で参加しているということです。私たちは公務員ではないので給料は違いますけれども（笑）

女性A：埼玉県草加市の学童保育連絡協議会から来ました。お聞きしたいのは、一度委託を受けたら、いつまでも委託を受けていられるのか、ということです。

設楽：基本的に単年度ですが、打ち切りということはまだありません。

女性A：それで、もし、区の方で打ち切りって言われたら、一方的にうち切りになるんでしょうか。（例えば、大きな問題が起こったり、打ち切られるような事件があった場合などは...）

設楽：それは行政ですからあるでしょうね。例えば川崎市みたいに事故が起きたりすれば、そういう団体ではもう運営はできないと思います。だから、私たちはそういう事故に対しては当然、職員会で意思統一してますし、子どもともルールをつくり、だからといって管理主義教育しているわけではなく、当たり前のことやっているということです。

女性B：乳幼児さん（の子育て支援）を午前中にやっているとお聞きしたんですけど、それはどこでやっている事業なんですか。

設楽：これは、板橋と足立でやっています。やはり学童クラブと共に地域の開かれた子育て空間ということで午前中は取り組んでいます。

女性B：板橋というのは学校の中ということなんですが、学校の中に乳幼児さんが来て、そういうようなことをしているということなんですか。

設楽：そういうことです。それで、私たちも多分学校の門だから入りにくいだろうなということで、地域の町内会とお話して、宣伝で回覧板を回してもらったんです。そして、来たんですよ。実際来るとなかなか面白いんで定着してきて、この5月から12月ぐらいまでで、200組ぐらい来られました。

女性B：そうすると学校との関わりがいろいろ問題になってくると思うんですけど、それは、学校でできるところとできないところがあるということですか。今まであるのは、2カ所ですけども、2カ所ともやっているということでしょうか。

設楽：それが区の方針なんです。ただ区より積極的にやりたいと思っています。ざっくりばらんに言わせていただくと、有効利用していると思っています。本当に地域で悩んでいる乳幼児のお母さんから、安心して週2回来れるところとして評価されています。200組のお母さんたちの中には、ずっと来てくれる

方々もいて、いろんな悩みを言うわけですね。親とのつながりを地域を通して大切にしていきたいと思っています。だから、区からは一応指示があるんですけど、自分たちとしても積極的に取り組んでいるということですよ。

女性B：そういう事業というのは、他の児童館でもやっているはずですが、児童館との連携というのはどういうふうになっているんですか。

設楽：例えば児童館に乳幼児のスペースあって、午前中の広場もやっている館がありますので、私たちは、曜日を選んでいきます。月曜日というのが、大体児童館の休館日なので。

女性B：児童館と、お宅様のやっている、その日にちがずれているということで、児童館と連携を取ったり、児童館との会話があるとかそういうことではないんですね。

設楽：私たちは、児童館の館長の指導のもとにあるんです。だから、近隣の児童館の館長と連絡を取り合いながら、児童館の職員とも交流がありますんで、そういうことで進めていっています。全く勝手にやっているということではないんです。

女性B：保育料関しては...

設楽：区と同じです。

女性B：今後、子どもがいっぱい集まっていきそうということなんですけど、定員オーバーになりそうなときは、どのような対応

をなさろうと思っていますか。

設楽：それはもう、オーバーはそのまま条件で、施設の敷地面積みたいなものが、区にありまして、それ以上はできないというのは受けています。私の所は45名です。入室決定は私たちのところであるわけではなく、区がするんです。

女性B：区の基準ということで、オーバーした人が入りたいと言っても、区が決めるので受け取れないということですか。

設楽：そういうことです。

女性B：障害児の問題もあるけれど、その障害児に余分に人をつけてもらえるかは区が決定することで、ワーカーズさんが希望しても受け取れないものは受け取れないと。

設楽：いや、ただ、区がどうしてもこの学童クラブで障害児を、例えば3名のところを4名でやってくれとやってきたときに、私たちとしてはやはり予算の増額を求めます。折り合いをつけながら。

女性C：でも今の流れでいうと、行政は予算を切りたいから「増額します、必要です」と言っても、なかなか「そうですね」といわないんじゃないかなって。その点がすごく心配なんです。

設楽：基本的にやはり保護者の思いもあるし、保護者は予算を増やせというかたちで当然区に要求するわけですよ。だから私たちも、共にそういう方向でやりたいという要望を出します。ただし最終決定は区が出しま

す。公務員でも同じだと思うんですが。

女性D：事業評価というか、最初の審査が通るところの審査主体、もちろん区は区なんですけど、どういう主体で構成されているのか。あと、単年度契約の場合、一応事業評価があって契約の更新になるのかなと思うのですが、事業評価の主体、あるいは方法というんですか、それはどういうふうにされるんでしょうか。あとちょっと違う話では、先ほど4年生以上のことで、親御さんとの間でってお話があって、その辺の「事業の自立性」というんですか、委託を受けた側がどの程度事業を自立的に運営できるのか、その幅みたいなものがどんな感じなのかなあと。

設楽：足立では自主事業というのも含めて4年生まで受けています。自主的にはできるんですが、やはり区に関しては言葉は悪いんですが「縛り」はあります。で、基本的には4年生は見れない。もっと深刻な事態は、例えば1年生は優先入所しますよね。そうするとやはり3年生の指数によってはさがってしまうということがあります。ただ、板橋区においてはそこまでは私たちは残念ながら権限がありません。

田中羊子：これも自治体によってさまざまなんです。他区のことなんですけど、企画提案の中では、例えば1年から4年となっても、定員に空きがあれば6年までという提案が受け止められることもあります。あと、事業評価のことなんですけど、足立区の場合はまだ外部評価はなくて、区の方が親子にアンケート調査を行って、その結果を調査して更新を行っています。今度受託した新宿区については、1分館ごとに父母会と地域の住民の

協議会をつくっていて、そこが事業評価に参加して、質が悪ければ事業者を切って...という仕組みになっています。

男性C：民間委託の話で先ほどから「風当たりが強い」とおっしゃっていたんですけども、こうして交流できる、お話しできる場面、私も求めていたんでありがたいなと思って、だからどンドンどンドン質問出てくるんだと思うんですよ。いくらでも質問したいことがある。そういうことだと思うんです。悪徳業者とかおっしゃっていましたが、そういうふうには思っていないくて、やっぱり良いことを聞きたいんですよ。私も文京で今会長やっていて、民間委託の話がでている真っ最中なんです。その質問に対して応えるためにも、こういう機会が欲しいなって思っていたんで。

設楽：一言だけ。この会長さんのおっしゃったことと、もう全然雰囲気が違うんですよ。「おまえら何しに来た」という感じの時もありますので、そういう意味では本当にこちらからお話したいと思っていたんです。私も個人的には保育運動してきた身としては、本当つらいんです。

菊地(司会)：この研究会は、もちろんいろいろ知識の交流や研究などの目的もありますが、実践のところでのちゃんとしたネットワークをつくるということが一つの目標だと思っていますので、この場、この外でもいろいろとやっていただけるきっかけになればと思っています。

後半の報告・質疑は次号以降に掲載します